

藤木大地 カウンターテナーリサイタル ピアノ：マーティン・カツ

1 部

献呈.....シューマン
 アヴェ・マリア.....シューベルト
 永遠の愛について.....ブラームス
 「3つのシェイクスピアの歌」Op.6.....ウィルター
 来たれ、死よ
 おお、わが愛しの人よ
 吹けよ、吹け、冬の風よ
 「4つの歌」Op.27.....R.シュトラウス
 憩え、わが心
 ひそかな誘い
 明日には！
 ツェチーリエ

2 部

「リュッケルトの詩による5つの歌曲」.....マーラー
 私はほのかな香りを吸い込む
 美しさゆえに愛するのなら
 私の歌を覗き見しないで
 私はこの世から姿を消した
 真夜中に
 「旅の歌」.....ヴォーン・ウィリアムズ
 放浪者 / 美しい人よ目覚めよ / 道端の火
 青春と恋 / 夢の中で / 無限に輝く空
 私はいずこにさすらうか / 言葉の響きは明るい
 坂を上り、坂を下りた

春

四季コンサート²⁰¹⁹

2019年4月11日(木) 18:00開場 18:45開演
 会場：アクトシティ浜松中ホール
 主催：浜松音楽友の会

プロフィール

藤木大地 (カウンターテナー)

2017年4月、オペラの殿堂・ウィーン国立歌劇場で鮮烈なデビュー。
 アリベルト・ライマンがウィーン国立歌劇場のために作曲し、2010年に世界初演された『メ
 デア』ヘロルド役での殿堂デビューは、日本人、そして東洋人のカウンターテナーとしても
 史上初の快挙で、現地メディアから絶賛されるとともに、音楽の都・ウィーンの聴衆から熱
 狂的に迎えられただけでなく、日本国内でも大きなニュースとなる。
 2011年、ローマ国際宗教音楽コンクールファイナリスト。2012年、第31回国際ハンス・ガボ
 ア・ベルヴェデーレ音楽コンクールにてオーストリア代表として2年連続で選出され、世界大
 会でファイナリストとなり、ハンス・ガボア賞を受賞。同年、日本音楽コンクール第1位。
 2013年5月、ボローニャ歌劇場にてグルック『クレーリアの勝利』マンニオ役でヨーロッパ
 デビュー。続いて6月にも同劇場にパッティステッリ『イタリア式離婚狂想曲』カルメロ役で
 出演。国際的に高い評価を得る。国内では、NHKニューイヤーオペラコンサートへの5年
 連続出演をはじめ、主要オーケストラとの公演や各地でのリサイタルがいずれも絶賛を博
 している。
 また、村上春樹氏原作の映画「ハナレイ・ベイ」(2018年10月公開)の主題歌を担当、同時
 にマーティン・カツ氏共演による待望のメジャーデビュー・アルバム「愛のよろこびは」
 (ワーナーミュージック・ジャパン) がリリース。2020年4月には新国立劇場の新制作オペ
 ラ ヘンデル『ジュリオ・チェザレ』にトロメオ役で出演することが発表された。バロック
 からコンテンポラリーまで幅広いレパートリーで活動を展開する、日本で最も注目される国
 際的なアーティストのひとりである。

Official Website <https://www.daichifujiki.com/>

マーティン・カツ (ピアノ)

40年以上にわたり声楽伴
 奏者として世界中で活躍。
 共演者は、マリリン・ホー
 ン、キリ・テ・カナワ、キャス
 リーン・バトル、ホセ・カ
 レーラス、フレデリカ・フォ
 ン・シュターデ、チェチー
 リア・バルトリ、ジョセフ・
 カレヤ、ビョートル・ベチャワ他、多数。
 ミシガン大学で30年以上にわたりピアノ共
 演法、声楽曲解釈等を教える一方、ミシガ
 ン・オペラ・ハウスやサンフランシスコ歌劇
 場に指揮者として出演。国外ではヘルシン
 キのシベリウス・アカデミーや東京の新国
 立劇場オペラ研修所に招かれ、若い声楽
 家の指導に従事。
 1998年、アメリカ最古の音楽雑誌「ミュー
 ジカル・アメリカ」で“Accompanist of the
 Year”を受賞。



藤木大地
 カウンターテナー
 リサイタル



DAICHI FUJIKI
 COUNTERTENOR
 RECITAL

●シューマン／献呈

シューマンは愛する妻クララ・シューマンのために多くの歌曲を作曲しており、〈献呈〉もそのひとつ。花嫁の飾りである花の名前を題名にとった歌曲集《ミルテの花》の第1曲め〈献呈〉は、結婚する年に花嫁クララへと捧げられた。詞はロマン派詩人リュッケルトによるもの。3部形式の第1部は忙しなく律動する音楽だが、第2部では一転、順次進行を多用した穏やかな音楽が展開し、第3部で再び第1部がかえる。制止できない愛を表すかのように前奏は1小節のみで間もなく歌に入り、最後は余韻を残すような長めの後奏で幕を閉じる。

●シューベルト／アヴェ・マリア

正式な曲名は〈エレンの歌 第3番〉で、歌詞はスコットランドの詩人ウォルター・スコットの叙事詩「湖上の婦人 *The Lady of the Lake*」(1810)のドイツ語訳に基づく。叙事詩の第6番めにあたるこの曲では、湖畔の岩上でエレンが聖母像へ父の無事を祈る内容が歌われる。歌詞の冒頭「アヴェ・マリア!」の叫びが象徴的なためか、現在では、さまざまな作曲家による〈アヴェ・マリア〉作品群にまぎって「シューベルトのアヴェ・マリア」としてよく知られている。3節の有節形式で、堅琴を模した6連符の伴奏にのせて伸びやかな旋律がマリアへの祈りを歌う。

●ブラームス／永遠の愛について

作品43の歌曲集の第1曲め。歌詞はチェコの詩人ヨーゼフ・ヴェンツィヒのものとの説と、チェコの民謡に基づくものとの説がある。青年と女性の対話風で、二人の行く先を悲観する青年に対し、女性は「鉄よりもかたい私たちの愛」と二人の愛の揺るぎなさを訴える。甘さと悲しさが同居しつつ、重厚な伴奏とスラヴの影響が感じられる音楽が力強く展開し、最後には希望に満ちた確信で締めくくられる。

●クilter／「3つのシェイクスピアの歌」Op.6

いずれもシェイクスピアの劇中歌における詩を採用している作品。第1曲めの〈来たれ、死よ〉はシェイクスピアの有名な喜劇「十二夜」で道化によって歌われる設定。歌詞の内容は悲劇的だが、そこに飾り気のない素朴で純粋な音楽がつけられている。メランコリーな雰囲気がある一方で、禁欲的な中に伸びやかさを含んだ旋律が繰り返される。第2曲めの〈おお、わが愛しの人よ〉も前曲同様に「十二夜」からとられた詩への付曲。付点を効果的に用いながら快活で小気味よい3拍子を刻み、歌詞のユーモラスさを表現している。第3曲めの〈吹けよ、吹け、冬の風よ〉は喜劇「お気に召すまま」の第2幕の劇中歌。3拍子だが、前曲とは異なり、短調の重厚な和音で曲が始まる。人生への嘆きを決して悲観しすぎることなく力強く歌う。途中で長調に転調すると、威勢のよい「ヘイ・ホー!」の掛け声を伴った躍然たる音楽で悲哀を吹き飛ばし、短調と長調の転調を繰り返したのち、最後は長調で解放的に幕を閉じる。

●R. シュトラウス／「4つの歌」Op.27

作品27は4つの歌曲からなる。〈憩え、わが心〉は、カール・ヘンケルの詩のもつ不安な心理を音楽で巧みに表現している。重苦しい和音で前奏が始まり、先行きのみえない孤独に満ちた歌が始まるが、やがて希望を表すような高音の鐘が鳴り響く。「憩え、わが心」の言葉とともに重い和音を打ち破るように音楽は前進し、疾風のようなスケールに導かれて再び希望が姿を現す。〈ひそかな誘い〉は、ジョン・ヘンリー・マッケイの官能的な詩に付曲した作品。宴の席で密かに相手を誘い出す場面の進行を転調を用いながら描いている。〈明日には!〉の歌詞もマッケイによるもの。短い曲ながら冒頭が13小節の美しい伴奏から始めるのが印象的である。幸福に包まれる穏やかな愛の歌。〈ツェーリエ〉は、情熱的な歌詞を高い技巧で歌いつくす難曲。詞はハインリヒ・ハルトによるもの。

●マラー／「リュッケルトの詩による5つの歌曲」

同じリュッケルトの詩に付曲した作品《亡き子をしのぶ歌》と同時期に作曲されているため、作曲手法に似た点が多い。第1曲めの〈私はほのかな香りを吸い込む〉は2つのシュトローフで構成される。第1シュトローフでは、声楽による柔らかな主題の提示と流れるように奏される伴奏とが印象的。第2シュトローフでは、主題の冒頭がなくなり、転調しながら変容する。〈美しきゆえに愛するのなら〉は、マラーが妻アルマのために書いたとされる短い愛の歌で、「美しきゆえにでもなく、若きゆえにでもなく、愛ゆえに私を愛してください」と訴える。6小節のシュトローフを4回繰り返すという単純な構造ながら、短調が現れたり最終シュトローフの終結音が6度の音であったりと効果的な表現が用いられている。〈私の歌を覗き見しないで〉は、歌のパートや全体のリズムに民謡的な要素が用いられている。形式はシンプルな2つのシュトローフからなっており、多少の変化をのぞいてはそれぞれのシュトローフが繰り返される単純な様式である。恋人のために歌を作っているのを見せ見しないでと願う歌。〈私はこの世から姿を消した〉は深いところからゆっくりと立ち上がってくるような声楽パートによる主題が特徴的。詩の3つのシュトローフに対応する形で終結部に類似する音形が現れる。〈真夜中に〉は全体を2つの部分に分けることができる。真夜中の不穏を歌う主部は詩の1から4節に対応しており、4つのシュトローフを構成している。他方の結尾部は詩の5節に対応している部分で、堂々としたコラールのような音楽が主部と対比をなしている。

●ヴォーン・ウィリアムズ／「旅の歌」

《旅の歌 *Songs of Travel*》は全9曲からなる曲集で、歌詞は『宝島』や『ジキル博士とハイド氏』で知られるスコットランドの作家ロバート・ルイス・ステューヴンソンの詩集に基づく。〈放浪者〉は行進風の和音に導かれる音楽でこれから始まる旅を予感させる。〈美しい人よ目覚めよ〉ではアラベスク調の音楽が異国の香りをただよわせる。〈道端の火〉は火のちらつきのような揺れ動く伴奏にのせて軽やかに歌われる。〈青春と恋〉では、歌、伴奏ともに感傷を引き出すような3連符の多用が印象的。〈夢の中で〉では、悲しみを引きずるようなシンコペーションの上の静かな語りが、ときおり半音で激しいダイナミクスを伴って変化する。〈無限に輝く空〉は、様々なものを包みこむ自然を夜の景色と重ねて歌う。〈私はいずこにさすらいか〉では、放浪する旅人の覚悟に裏打ちされた旅への思いと過去からの解放の意思が歌われる。〈言葉の響きは明るい〉は力強い伴奏から始まり、柔らかな音楽にのせて言葉の力を説く。最後の〈坂を上り、坂を下りた〉では、それまでの4つの曲からの引用を結ぶ息の長い音楽で静かに曲集を締めくくる。

はりうちあやこ（音楽学研究者／音楽評論家）

アンコール曲 1. ヴォーン・ウィリアムズ／リュートを弾くオルフェウス

2. 山田耕柞／この道（歌詞：北原白秋）

他一曲